

特集

沖縄を知る 沖縄から学ぶ ワーカーズコープ

沖縄返還協定における日米の密約を暴露する新聞記者を描いた『運命の人』は、ベストセラー作家であった山崎豊子の事実上の遺作となっている。この作品には、「ひめゆり」世代であった彼女自身の同時代性をも投影している。その強い思いが背景にあって、国とは国家とはなにかラジカルに問う小説になっている。日本と中国の残留孤児を描いた『大地の子』、日系二世として日米開戦に翻弄されていく『二つの祖国』もまた、同じような問いであった。

しかし、『運命の人』の舞台は中国でも米国でもなく、日本国内の出来事であった。山崎は、同じ「日本」に沖縄が存在するというなら、正義とか人権というにはほど遠い、得体のしれない深みと闇に入り込み引き裂かれているという一節を主人公に語らせている。先般の翁長知事の発言もまた、戦後の日本が始まらない沖縄の慟哭を冷静な語り口ながら、民意を代表する形で福岡地裁の中で意思表示している。(12/2付朝日新聞に全文掲載)

山崎にとっての沖縄は、「本土」(ヤマト)決戦を前に「捨て石」にした日本であった。しかも、いまに至ってもまだ沖縄を「捨て石」にして平然としていられる「本土」(ヤマト)の人々なのである。狡猾で内発的羞恥心もない、その贖罪のありようを自らに対しても問いたかったのだといえる。山崎は一昨年秋に帰らぬ人となった。しかし山崎が突き付けてきた問いの心意と責務は具体的であった。山崎ファンなら誰ひとりとして沖縄の軍事基地移転問題から逃れることなどできようか。

戦後沖縄は、米軍占領下の軍事基地問題を軸に大政治問題として、ずっと揺れ動き様々な社会運動の形で闘われてきた。現実の捉え方と歴史認識に違いはあっても、沖縄戦体験者の傷みを共感できるような大物政治家が自民党にすらいた。しかし、その痕跡をいま見つけるのは難しい。

蚊帳の外にいと、「保革イデオロギー」の裁断による色分けしか、どうにも説明がつくまい。71年前に始まった沖縄戦から翌年の敗戦と、それ以降の記憶の軌跡をどのように沖縄の人々が共有してきたのか、推し量ることの考察力もである。それは戦争体験者のみに限定されない、イデオロギーを超越して多くの人々に継承されてきた。

「オール沖縄」にみられた沖縄の「尊厳」と「アイデンティティ」は、そこからだと先ず理解したい。沖縄県民にかけられてきた人権の蹂躪とそれに対する怒りと誇り高き抵抗の足跡は、静かな雄叫びとなって木霊しながら、深く脈々と通底していたとしか言いようがない。沖縄振興予算の補助金をどれほど積算されようとも動ぜず、民意の審判のみに忠実でありたいとする知事の決然とした姿勢が、日本政府の高飛車かつ邪まな決定にも断固たる態度として表れていた。

考えてもみれば、仲里利信衆議院議員は辻立ちで、1609年の薩摩藩による琉球軍事侵略から苦難の歴史の緒を説明していただではないか。くわえて琉球王国は、明治政府よりも幕府よりも先にイギリス、米国など諸外国と通商条約を結んでいたとの史実を説法していた。いまここで私は、沖縄独立論

や沖縄先住民論の賛否を論ずるつもりは毛頭ない。ヤマトの人間であった私は学校教育において、当時の日本政府に従わなかった「琉球人」を「琉球処分」したくらいのことしか教えられていなかった。

近代史のレベルだけではない。沖縄にまだ残影するアニミズムの自然崇拜の信仰美も。なぜガジュマルの木にキジムナー（森の妖精）が住んでいるのか、なぜ亀甲墓は母胎をイメージさせているのか、なぜ小さな島にグスク（城）が数百もあったのか等々、自らの体験と探索で学ぶしかなかった。そして、最も忘却されてはいけなかったことは、沖縄のシマ社会に見られる閉鎖的でなく排除もない「いちやりばちよーでー」に象徴される親近性と開放的な人間観であろう。人間の原初的かつ根源的な姿が沖縄にはまだ残っている。それは沖縄（観光）の自然観、社会観として、思想にも付帯して魅了しつつある。それぞれに沖縄を旅した人たちの「私の沖縄」として吸引してきたに違いない。

この感動を重ねるからこそ、沖縄の基地はその自然と社会とは全く似つかわしくもなく醜態化して見える。居座る殺人鬼の軍事基地を撤去してもらいたいという気持ちが倍返しとなるのだ。紺碧の海の内側にあるリーフで、洗骨する先祖霊の伝承風景からも人間のいたわりの気持ちは伝わり、自分の心まで洗われているかのようである。沖縄の尊厳とアイデンティティーは「沖縄ブルー」からはじまる人もいるだろう。その気さえあれば、どこにでも見つけ出あうことができる。

こうした沖縄を守り培ってきたのは、明らかに「シマ」の「ゆいまーる」(地域コミュニティ)だった。人類史遺産でもあったこの地域コミュニティの形成は、近代化、近代国家の発展と引き換えにされている。かつて本土にもあったが、高度経済成長から崩壊しはじめ、21世紀に入って子どもから若者、高齢者へとあらゆる層にまで孤立と分断が顕著となってしまった。そこに残ったのは、対社会との関係性を遮断され、バラバラにされてしまっている孤独な個々人の「社会」しか内在化されておらず、最後の砦ともいわれてきた家族という形すらもが揺らぎ崩され続けている。社会の大病というしかない。

長い休憩時間中にリラックスする沖縄大学の学生たちと打ち解けて対話していたとき、はにかみながら語る沖縄での厳しい暮らしの現実と、その背景をも暗黙のうちに確認できたようにおもう。別れざわ『なんくるないさー』と、その学生にいわれてしまった。このコトバの使い方の厳密な意味をもう一度たしかめてみたいと思った。

沖縄はいま、ドラスティックな展開を日々繰り広げている。なぜこれほどまでして日本政府が先鋭的な刃で沖縄を切り捨てようとするのか、本号の巻頭言は、その現況と事由を時々刻々と伝え掘り下げている。

耐えることをずっと強いられ、過酷な弾圧にも諦めないで生き暮らしてきた沖縄に、明るい未来への希望を少しでも語ってもらおうとするとき、悲喜劇こもごもを天性で演じられるのはオジーやオバーたちだが、そうとばかりはいかない。てらいのない沖縄の若者、学生たちを抜きには考えられない。沖縄の子ども若者たちの近未来にある就活、就労状況は依然として最悪だ。その実情を雑駁に知っていたつもりでも、よりリアルなデータを突き付けられると打ちのめされる。それだけではない。沖縄国際大学の学窓から見える200メートルほど先の滑走路からは、数十機ものオスプレーが整然と並び頻りに離着陸しているのではないか。大学の「お隣さん」は普天間基地なのである。2004年には学

内にヘリが墜落している。何重もの防音窓を貼り付けた中での、大学人と学生たちによる就労に向けた模索と努力には首を垂れてしまうが、その出口を村上論文は同時に活写している。

そこから更に南下した大学が日本最南端にある沖縄大学だ。そこで日本で初めて労働者協同組合による「ワーカーズコープ論」の授業が始まった。寄付講座企画の経緯と意義については、センター事業団藤田理事長の論稿に掲載されている。講師を毎週派遣できない事情もあって、夏期集中寄付講座の形式で開講された。全日程を出席してレポート提出すると学生は2単位を取得できる。今夏は複数の講師陣容で15コマの回数を分担した。はじめての試みだったので、応援講師陣となっているが、本来は沖縄事業所の現場「先生」たちの講師が望ましいだろう。これを契機に全国各地の事業本部でも講座が開催されていくにちがいない。とりわけ地元「協同集会」、「よい仕事集会」などが大学寄付講座と連動していくことが期待されている。現地責任者となった渡口氏が語っているように、大学であっても、ひとつのワーカーズコープ事業所活動の対象地域として、市民と社会連帯するのと同じように大学とも連帯しなくてはならない。また沖縄大学の多くの関係者が歓待してくれたことは記憶に新しいが、沖縄大学は、地域と市民と連帯する大学であることをはっきりと謳っている。（「沖縄大学の理念と建学の精神」より）

だから市民との垣根を乗り越えた、市民のための土曜市民教養講座を沖縄大学地域研究所は開催してきた。歴史的にも由緒ある講座に「ワーカーズコープ運動の挑戦と沖縄」という労協連理事長の永戸祐三記念講演が最終日の土曜にあてられた。くわえて加藤彰彦沖縄大学前学長と新崎盛暉元学長も加わるという鼎談までセットされた。

寄付講座の大学側の担当責任者である島袋報告には、沖縄大学の関係者から並々ならぬ支援があった事実が伝えられている。来年度にも寄付講座を継続させて、座学のみならずワーカーズコープでの現場学習も相当時間とり入れてみたいという提案と、「起業」できる学生たちが育つことを大いに期待していると記されている。

（上平泰博）

* 「寄附講座」とは、個人、団体、民間企業等の奨学寄附金等の財源によって開設され、学内の学部、学科、研究部門等において開講科目講座として設置されている。民間資金による寄附金を財源にした期限付き客員教員を招いて開かれる講座などもある。「寄附講座」は、一般的には複数年度にわたって開設される。「寄附講座」の開設と運営の方法は、様々なスタイルがあって、大学の理念と方針によって異なる。

今年ワーカーズコープが試みた「寄附講座」は、営利企業などにみられる紐付き高額投資の「寄附講座」とは違い、市民主義、地域主義に立脚することを本旨とする。講座開設の大学へは、現場で働いて実践する組合員を講師派遣することを基本に、講師陣も学生たちといっしょに学び直すという視点から、「ワーカーズコープ論」を依頼し実現した。